

日本陸軍航空史（その30）

～航空特攻（5）～

1 はじめに

私が陸自航空学校霞ヶ浦校の総務課長をしていた平成11年のある日曜日の正午ころでした。ヘリコプタの体験搭乗終了後、庶務幹部の N2 尉から「先ほど体験搭乗をされた方の中に、少年飛行兵出身の方が何名かおられ、なんでも特攻に行く主人の足手まといにならないようにと、母子が川に身を投げられたそうで、今からその家族のお墓参りに行かれるそうです」という報告を受けました。「そのような悲惨な事件があったのか・・・」と衝撃を受けました。

翌週の日曜日に靖国神社『遊就館』を訪れたのですが、導かれたように、ある展示の前に行くと、そこには、「**絶忠 君が為 数ならぬ身の我命 散らばや散らん 肉弾(タマ)と砕けて**」という新聞紙に筆で大書された辞世の句がありました。そのとき、藤井 一(はじめ)中尉の名前を初めて知ったのです。

藤井中尉は茨城県の農家に七人兄弟の長男として生まれましたが、後を継いでほしいという父母の願いをよそに、強い希望で陸軍に入りました。そして昭和20年5月28日、第45振武隊長として10名の部下とともに2式複戦『屠龍』で敵艦に突入し、29歳の生涯を閉じました。同中尉は歩兵機関銃隊から航空士官学校に少候21期生として入校しましたが、支那戦線で左手に迫撃砲弾を受けており、操縦士になるのは無理でした¹⁾²⁾。奥さんの福子さんは高崎市の商家に三女として生まれ、ピアノや歌が得意の才女で、大陸で野戦看護婦として勤務中、入院した同中尉と知り合い結婚しました²⁾。



藤井一中尉(webから)

昭和18年春から熊谷飛行学校少年飛行兵16期・17期の生徒隊中隊長として精神教育を担当した同中尉は、「**事あらば、敵陣或いは敵艦に突入自爆せよ。中隊長も必ず行く、決してお前たちだけをやらぬ**」と説きました。『言行一致』が同中尉のモットーだったといえます(少飛17期・藤井博一氏談¹⁾)。

やがて特攻が始まり、多くの生徒を特攻に送り出した責任感から自らも特攻を志願しますが、上司は「中隊長としての任務を全うせよ」と二度にわたり却下しました。福子さんは「搭乗員でもないあなたが特攻に行く必要はない」と何度も思いとどまるよう説得したのですが、夫の決意が固いことから、「**お先に行っておりますから心おきなく戦って下さい**」という遺書を残して、同中尉が週番司令勤務の機会を狙って借家近くの荒川に身を投じました。福子さん、3歳の一子ちゃん、生後4ヶ月の千恵子ちゃんの遺体が上がったのは、寒風吹きすさぶ昭和19年12月15日の早朝でした。千恵子ちゃんは晴れ着を着ておんぶされ、同じく晴れ着を着た一子ちゃんの手はお母さんの手と固く紐で結ばれていました。

藤井中尉は、今度は血書の特攻嘆願書をしたためます。陸軍としても大事件を起こした同中尉を学校に置いておくわけにはいかないということで、異例の許可を与えます²⁾。藤井中尉が特攻の直前に妻の父親に送った遺書には、「**ふく子、一子、千恵子に逢えることを楽しみにしております**」と書かれていました。妻子は、筑波山を望む藤井家代々の墓の隣に眠っているそうです¹⁾。

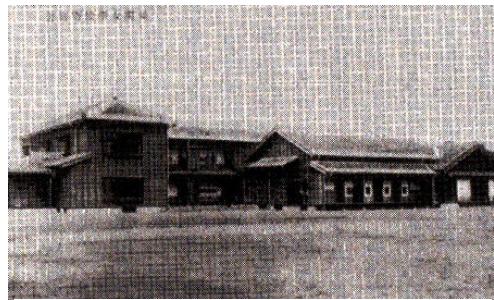
これと対照的な事件がありました。参考文献2と参考文献5とでは内容が異なりますので、新しいほうの参考文献5を引用します。第67振武隊の2機が他の飛行機に衝突・破壊されて出撃できなくなり(他の隊員は昭和20年4月28日に突入)、知覧の軍用旅館『永久旅館』に滞在してい

た同隊の山下尚武少尉のもとに突然夫人が訪ねてきて、出撃を思い留まるよう迫りますが、同少尉に拒否されるや、持ってきた短刀で自分の腹を突き刺しました。奥さんは病院に收容され、山下少尉は三角兵舎に泊まったのち、5月12日に第6航空軍に代替機受領に行き、博多駅前の『大盛館』という軍用旅館に泊まりました。

大盛館は、特攻のため知覧に出発する者が一泊したり、知覧などから出撃後帰還し、あるいは出撃しようとして機体の故障のために出撃できずに、新しい機体を受領するために第6航空軍司令部に赴いた者たちを收容する施設でした。山下少尉の奥さんは傷が浅かったために動けるようになり、また夫の居場所の大盛館を探し出して、特攻をやめるよう説得するのですが、夫は「帰れ！」と言うばかりなので、とっさに夫の拳銃を取り上げ自殺しようとし、誤って自分の太腿を撃ちます。同少尉は逆上し、軍刀で奥さんを斬ろうとして騒ぎになり、両者が取り押さえられます。

大盛館では特攻帰還者が多くなって、出撃前の者が彼らと目を合わせれば士気が低下すると懸念され、また、軍神として見送られ、死んだと思われている彼らが国民の目に触れるのはまずいとして、実質的な強制收容施設『振武寮』(しんぶりょう)に移されました。その收容人員は多い時期には50名にも上りました。

同少尉もここに移され、出撃をしないまま終戦を迎えました。山下夫妻は生き残ったわけで、二人の奥さんのどちらのやり方が良かったのかということはいえませんが、非常に対照的な事件でした。



振武寮(福岡女学院寄宿舍を使用)⁵⁾

「俺もあとで行く」という言葉は、生存者の証言によりますと陸海軍の将官から尉官までの多くの指揮官が発していますが、その多くは儀礼的に発せられた言葉であり、実際に行動に移した人は稀です。しかし、藤井中尉は愚直に言行一致を貫きました。

大西瀧治郎中将は、もともと特攻に反対であったものの、フィリピン航空特攻を指揮しながら、「陛下がこのようなことはやめろとおっしゃるだろう、もう戦争をやめろとおっしゃるだろう」³⁾と陛下に責任を転嫁し、また、「日本人の五分之一が戦死する前に敵の方が参ることは請け合いだ」³⁾と人命軽視と受け取れる発言をしています。同中将は多くの部下を特攻で死なせた責任を負い、終戦の翌日に割腹自殺をされています。

昭和20年8月15日の終戦の詔勅のあとに、第5航空艦隊司令長官・宇垣 纏(まとめ)中将が、一人で自決すればいいものを、701空大分派遣隊の彗星艦爆11機を率い、同日1630に離陸して特攻を行い(3機不時着し、不時着した6名中1名が死亡。8機突入)、前途有望な若者をいたずらに死なせてしまったことは、重大な海軍刑法第31条(「指揮官、休戦又は講和の告知を受けたる後、故なく戦闘を為したるときは、死刑に処す」)違反の罪でした。

宇垣中将は8月14日夜、日本降伏の決定を知り、自分の乗機1機と沖縄までの護衛機2機の準備を命じました¹³⁾。横井参謀長は思いとどまるよう説得しましたが説得しきれず、第12航空戦隊司令官 城島少将を呼んで説得しましたが、「死所を与えてくれ。頼む」と哀願されたために、特攻機を5機に増やすことになりました¹⁴⁾。しかし、8月15日1300に集まったのは11機でした(参考文献14では9機)。そして、機上の司令長官に遠藤秋章飛曹長が、「司令官、そこは私の席ですよ。降りて下さい」と言いましたが聞き入れられませんので、やむを得ず司令長官の膝の上に乗って出撃しました¹³⁾。

宇垣中将の突入を知り、8月15日午後8時、**第6航空軍高級参謀・鈴木 京大佐**が菅原中将に対し「重爆1機、特攻爆装を済ませてお待ちしております。鈴木も出撃の相伴をします」と申し出ました。しかし同中将は「死ぬばかりが責任を果たすことにはならない」と断ったそうです⁶⁾。卑怯だと言う人もいますが、私は終戦という時期を考えれば適切であったと思います。同中将は、8月中旬に司令官特攻の準備をしていましたが、8月12日に日本の降伏が決まったために中止しています²⁾。同中将は戦後、特攻戦没者の慰霊活動をしながら、95歳の天寿を全うされました。

志賀淑雄海軍少佐は真珠湾攻撃時の空母『加賀』の制空隊長で、『飛龍』『準鷹』『信濃』と、艦が沈められるたびに母艦を乗り換えて零戦隊の隊長を務め、最後は源田大佐率いる松山第343航空隊の『紫電改』戦闘機隊の飛行長として勤務していましたが、「特攻は邪道である」と公言し、軍令部からの特攻隊員割り当てをすべて拒否していました。ある日、軍令部の高級参謀が説得に来た際に「どうしてもというなら、私が特攻隊を志願します。そのときは貴官も私と一緒に征きましよう」と申し出ましたが、その参謀は逃げ帰ってしまいました¹⁵⁾。この事例を書いた佐々淳行氏は「殉職者を部下から出すと、指揮官は生涯そのことを重い十字架として心に背負うことになる」¹⁵⁾と述べています。

2 沖縄作戦における特攻(後半)

(1) 航空総攻撃・菊水作戦の概要³⁾⁴⁾

聯合艦隊は陸海軍航空全力による総攻撃開始を昭和20年4月6日と決定し、「この航空総攻撃の成果を利用して、戦艦大和が敵の上陸海岸に殴り込みを行い、第32軍が攻勢に転じ、敵を海に追い落とす」という無謀な計画を立てました。航空攻撃の作戦名を、陸軍は**航空総攻撃**と呼び、海軍は**菊水作戦**と呼びました。菊水は楠木正成の旗印であり、「負け戦だが天皇のために戦って死ぬのだ」という意味が込められているように思えます。作戦の概要は右表のとおりです。すべてが特攻ではなく、第32軍の作戦や敵の艦船の動向に応じた作戦が行われました。

陸海軍の航空作戦の概要³⁾

期 間	陸軍作戦名称	海軍作戦名称
4/6~7	第1次航空総攻撃	菊水1号作戦
4/12~15	第2次航空総攻撃	菊水2号作戦
4/16~17	第3次航空総攻撃	菊水3号作戦
4/21~22	第4次航空総攻撃	
4/21~29	第5次航空総攻撃	菊水4号作戦
5/3~9	第6次航空総攻撃	菊水5号作戦
5/11~14	第7次航空総攻撃	菊水6号作戦
5/24~25	第8次航空総攻撃・義号作戦	
5/25		菊水7号作戦
5/27~28	第9次航空総攻撃	菊水8号作戦
6/3~7	第10次航空総攻撃	菊水9号作戦
6/22		菊水10号作戦
6/23~8/15	断続的な特攻	

4月6日1520、戦艦大和は徳山港を出港しましたが、4月7日午後、敵約300機の攻撃を受けて沈没、軽巡『矢矧』、駆逐艦4隻の沈没を含めて、**3,721**人もの将兵が戦死し、かろうじて4隻の駆逐艦だけが佐世保に帰港しました。この特攻作戦を発案した**聯合艦隊主席参謀・神 重徳大佐**は、「米軍攻略部隊に対する航空総攻撃について軍令部総長が奏上した際に、陸下から航空部隊だけの総攻撃かという御下問があったから」³⁾⁴⁾と言って天皇に責任転嫁しています。

第2航空艦隊司令長官・伊藤整一中将はこの作戦に反対でしたが、草鹿参謀長の「一億総特攻のさきがけになっていただきたい」という説明に、「そうか、それなら分かった」と妙に納得しました³⁾⁴⁾。「死ぬこと自体が作戦の目的である」というずいぶんおかしい遣り取りでした。

航空に限らず特攻で殉職された方のお名前、日付、機種、機数などは、ほとんどの出版物に記されています。それは、旧海軍に「命令は、九死一生をもって限度とする」という伝統がありながら、陸海軍においてやむを得ず「十死零生」の特攻作戦が採用され、このように異常な環境下で、国のため、家族のために突っ込んでいかざるを得なかった英霊の御親族や関係者へのせめてもの顕彰の気持ちであろうと思います。私もすべて書きたいのですが、あまりにも特攻殉職者が多く紙面に収まりませんので、残念ながらほとんどを割愛させていただきます。

(2) 4月の航空総攻撃・菊水作戦¹⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁷⁾⁹⁾

初日、4月6日の攻撃はすさまじいものでした。戦史叢書によると、陸軍133機(うち特攻82機)、海軍391機(うち特攻215機)、計524機(うち特攻297機)に上ります。戦果も相当なものでしたが、海軍の未帰還機が178機(うち特攻162機)、陸軍の特攻未帰還機が50機と犠牲も大でした⁴⁾。

右の写真は、4月6日、知覧出撃直前の第43振武隊員です。清沢守・酒井忠春・簗島武一・村上稔少尉(特操1)、浅川又之少尉(幹候19)がこの日に、また、4月12日に大野宗明・岸誠一・前田敏少尉(特操1)が、1式戦で沖縄西方海上の艦船に突入しました¹⁾。



知覧出撃直前の第43振武隊員⁹⁾

4月12日にも大規模攻撃が行われ、戦史叢書『沖縄方面海軍作戦』では、海軍が354機(うち特攻103機)、未帰還114機(うち特攻69機)、陸軍特攻72機となっています⁴⁾。わが重爆4機は午前4時、北・中飛行場を爆撃し、5機炎上、5ヵ所爆発・炎上を報じました。また、この日の撃沈は駆逐艦『マンナート・L・エーブル』のみでしたが、これが人間操縦爆弾『桜花』の戦果でした。明確に桜花による撃沈とされているのはこの1隻とするのが普通ですが、桜花部隊の戦友会が著した『海軍神雷部隊』によると「米軍が確認した戦果は沈没3隻、損傷6隻」だそうです³⁾。

第32軍の第一線陣地は約6コ師団の敵に蚕食され、飛行場には約190機が認められました。

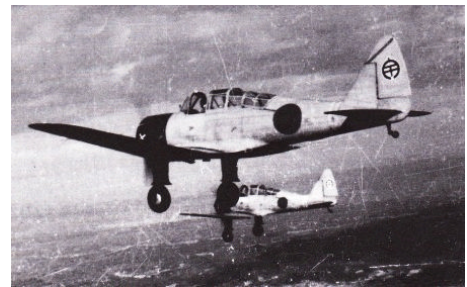
4月16日にも大規模攻撃が行われ、上記戦史叢書では、海軍が通常攻撃246機、特攻169機、陸軍が通常攻撃41機、特攻51機となっています⁴⁾。この日の撃沈は、駆逐艦『ピリングル』のみでしたが、これが『桜花』の戦果とも受け取れるようです³⁾。戦艦『ミズーリ』は、4月11日に至近距離の特攻攻撃を受けて損傷していましたが、この日今度は直接体当たり攻撃を受けました。

この日の早朝、零戦で石垣島を出撃した齊藤飛曹長は、発動機不調で台湾の宜蘭(いらん)に引き返しましたが、205空司令・玉井浅一中佐(元201空副長で、最初の神風特攻隊を編成した)は下士官兵搭乗員の前で、「特攻に出た者がエンジンの不調で何故帰って来るか、エンジンが止まるまで何故飛ばないか」と、臆病者、卑怯者呼ばわりをしました。「死ぬことが目的だ」ということを端的に言ったわけです。翌日、3機が出撃し、他の2機は敵を見つけられずに帰還しましたが、齊藤飛曹長だけは、同僚に対して「特攻は命中しなくても、戦果は上げなくてもよいのですね。死ねば成功ですね」と言って出撃し、帰ってきませんでした³⁾⁴⁾。彼は新婚でした。

陸軍の『と号空中勤務必携』に、『中途から還らねばならぬ時は』という項目で、「天候が悪くて自信がないか、目標が発見出来ない時など、落胆するな。犬死にはしてはならぬ。小さな感情は捨てろ。国体の護持をどうする。部隊長の訓示を思い出せ。そして、明朗に潔く還って来い」と書かれています⁶⁾。しかし、実情は全く違っており、前記の振武寮では、第 6 航空軍参謀・倉澤清忠少佐が毎朝 6 時半にやってきて、「生きて帰ったお前たちには、飯を食べる資格がない」と言って隊員を竹刀で殴りつけ、酒を飲んでの暴行もたびたびありました。このため同少佐は戦後、80 歳になるまで、仕返しを恐れて実弾入りの拳銃を持ち歩き、家では軍刀を手放しませんでした。因みに同少佐は 86 歳の天寿を全うしました⁵⁾。

海軍は、菊水 3 号作戦を転機として、積極的な特攻作戦を行わなくなりました。理由は、「敵の戦力が減少する兆しはなく、わが国の航空機生産能力が月産 600 機程度であり、本土決戦のためには戦力を温存すべきだ」ということからでした。しかし、一挙に沖縄から手を引くこともできず、ずるずるとなし崩し的な特攻作戦が続けられました⁴⁾。

4 月 22 日の第 4 次航空総攻撃では、初めて練習機が特攻に参加しました。99 式高等練習機です。ただし、この機体は 98 式直協偵察機を改造したものですので、練習機ながら最大速度は 349km/h でした。海軍は 7 月 28 日に、赤トンボの 93 式中間練習機(最大速度 210km/h)で、駆逐艦『キャラガン』を沈めていますので、無謀な攻撃ではありましたが、戦果を挙げています。前号で述べた陸軍の赤トンボ 95 式中等練習機の特攻出撃記録はありません¹⁾ので、少し気が休まります。因みに特攻機を待ち受けていた F6F-3 の最大速度は 597km/h であり、10km/h の差が空戦上決定的ですから、爆弾を抱えた練習機がその攻撃を避けて敵艦に突入できたのは奇跡と言えます。



立川 99 式高等練習機⁷⁾

4 月 28 日の攻撃には、海軍 271 機(うち特攻 70 機)、陸軍特攻 51 機が参加しました。特攻機は傷病者輸送船『コンフォート』と輸送病院船『ピンクニー』にも体当たりをしました。上空から見えるような赤十字の標示がなされていなかったためでしたが、コンフォートでは看護婦 10 名を含む 47 名が死亡しました。ピンクニーには大砲も備えられ、戦闘艦のような格好をしていました³⁾。

4 月 29 日の攻撃には海軍約 30 機、陸軍約 10 機の特攻機が参加し、駆逐艦 2 隻、敷設駆逐艦 2 隻に損傷を与えましたが、駆逐艦『ヘールズウッド』では艦長以下 46 名が戦死し、本国に回航されました。また、4 月 30 日には陸軍機のみ 24 機が出撃し、駆逐艦 2 隻が損傷を受けました。

(3) 5 月の航空総攻撃・菊水作戦¹⁾³⁾¹²⁾

5 月 3 日には海軍が 24 機で特攻をかけ、20 機が帰還しています。これは多すぎる帰還機数です。しかし、米軍の記録では駆逐艦 3 隻撃沈、軽巡等 8 隻撃破となっていますので、これは 5 月 4 日分を含んでいると思われます³⁾。

第 32 軍は命運を賭ける攻勢転移時期を 5 月 4 日として、航空機による支援を要請してきました。この日、海軍 136 機、陸軍約 65 機による特攻で、護衛空母 1 隻、駆逐艦 1 隻、敷設駆逐艦 1 隻、掃海駆逐艦 1 隻、掃海艇 1 隻撃破の戦果を挙げました³⁾。

5月7日、ナチス・ドイツが無条件降伏し、トルーマン大統領は翌日、日本に無条件降伏を勧告しましたが、日本は応じませんでした。5月9日、第6航空軍は海軍と協議して**第7次航空総攻撃**の開始時期を5月11日とし、**義烈空挺隊**の飛行場突入を参謀本部に要請しましたが、梅津参謀総長は成功を危ぶみ、これを承認しませんでした。5月10日、陸・海軍の重・軽爆、4式戦15機、桜花2機が暗夜をついて北・中飛行場を攻撃し、9ヵ所炎上を報じました。

そして5月11日、**第7次航空総攻撃と菊水6号作戦**が行われ、陸軍は40機の特攻機、海軍は通常作戦機175機・特攻機69機を出撃させました。同日の最も大きな戦果は、**正規空母『バンカーヒル』**に2機体当たり命中をさせたことで、バンカーヒルでは約**3,500名の乗員中戦死402名、戦傷264名、飛行機約100機焼損の被害**が出ました。

参考文献12には、バンカーヒルに突っ込んだ二人の海軍操縦士の生い立ち、飛行甲板に残された機体や偶然残された、生きているかのような小川少尉の遺体上半身の状況、生々しい乗組員の被害状況などが克明に記されています。

最初に突っ込んだ**安則盛三**(やすのりせいぞう)中尉は兵庫県出身で旅順師範学校から第13期海軍予備学生となり、次に突っ込んだ**小川清**(おがわきよし)少尉は群馬県出身で、早稲田大学政経学部から第14期海軍予備学生となりました。体当たりしたのは500キロ爆弾を積んだ零戦52丙型でした。

右の写真は、トニー・ファッコーネが撮影したもので、昭和20年7月の『ライフ』誌に掲載されて有名になりました。

5月14日、『司偵振武隊』という隊名の百式司偵特攻機3機(古山・山路少尉、熱田軍曹)が突っ込んだのは、米海軍の記録ではこの**バンカーヒル**のようです。同記録では同日、駆逐艦1隻が桜花によって損傷しています¹⁾。



炎上するバンカーヒル¹²⁾

5月16日、32軍の終焉が近いという判断から、『**義号作戦**』が認可され、これに連携する特攻作戦が計画されましたが、天候不良のために19日に企図した**義号作戦**は実行されず、単独の陸軍特攻が17日、18日、20日、21日に行われ、38名が殉職しました。**義号作戦**は24日に実行されましたが、その内容は前号で述べたとおりです。

5月25日、義烈空挺隊による米軍混乱に乘じ義烈空挺隊の攻撃に連携するための特攻が行われましたが、悪天候下、あえて九州から出発した陸軍機70機のうち、突入の電報を發したのは24機でした。殉職者は70名に上りましたが、戦果はなかったようです。

5月26日、27日にも特攻が行われ22名が殉職しましたが、27日午後に米軍から義烈空挺隊全滅が公表されました。

第6航空軍は海軍と連携しての航空総攻撃を5月28日に計画していましたが、前日の27日に海軍は、近く出現が予想される敵機動部隊に備えるという理由で参加を断ってきました。しかし、第6航空軍は第32軍を見殺しにできないと、陸軍単独の**第9次航空総攻撃**をかけます。特攻機57機、護衛戦闘機33機が出撃し、33機が突入成功を報じ、46名が殉職しました。冒頭に述べた**藤井中尉**は、この日に突入しました。5月29日の特攻では6名が殉職しました。

(4) 6月の航空総攻撃・菊水作戦等¹⁾⁴⁾

大本営は沖縄作戦の終焉が近いと見て、本土防空に力を入れようと考えていましたが、第6航空軍は懸命の作戦を遂行しており、海軍と協同して6月1日の第10次航空総攻撃を実行する考えでした。しかし、天候不良のため延期となり、6月1日には悪天候について出撃した3名が殉職しました。

天候が回復した6月3日、第10次航空総攻撃が行われました。陸軍は特攻機39機、護衛戦闘機17機で、13機が突入成功を報じ、27名が殉職しました。海軍は特攻機6機、護衛戦闘機64機で出撃しましたが、戦果は不明でした。

6月5日、6日にも第8飛行師団12機による特攻が行われ、12名が殉職しました。6月6日には第6航空軍の特攻機30機が出撃し、25名が殉職しました。米軍資料によると、両日の攻撃で、戦艦『ミシシッピー』、重巡『ルイズヴィル』、護衛空母『ナトマ・ベイ』、駆逐艦『ヴィール』、敷設駆逐艦2隻が損傷を受けています。6月7日には6名、6月8日には13名、10日には3名、11日には13名が特攻戦死しました。

(5) 沖縄戦の終末¹⁾⁴⁾

第6航空軍は、6月15日に海軍との協同で第11次航空総攻撃が行う予定でしたが、天候不良で実施できず、6月18日、牛島司令官は大本営に決別の電報を送り、6月23日未明に長参謀長とともに自決しました。

最後の組織的特攻は4式戦の優秀特攻隊が行いました。6月21日には第26振武隊:相良鈞郎・木村清治中尉、永島福次・西宮忠雄少尉、6月22日には第27振武隊:川村 勝中尉、熊沢弘之・高橋 毅・原田 栞・矢口 剛・奈良又男少尉、第179振武隊:金丸 享中尉、江副保郎少尉、太田外茂行・浜田 斉・松尾秀雄伍長が出撃しました。

米軍資料によると、6月21日には護衛駆逐艦『ハロラン』、水上機母艦『カーティス』、水上機母艦『ケネス・ホワイトティング』、駆逐艦『パリ』、中型揚陸艦59号、6月22日には掃海駆逐艦『エリスン』、戦車揚陸艦LST-534、中型揚陸艦213号が損傷を受けており、大いなる戦果を挙げています。

7月1日には第180振武隊(4式戦)の宇佐美輝夫・新田祐天伍長、7月19日には誠第31飛行隊(99襲)の藤井清美少尉、誠第71飛行隊(99襲)の中島尚一伍長、飛行第204戦隊(1式戦)の織田保也少尉、笠原卓三軍曹、渡井 香・塚田方也伍長が突入し、沖縄特攻作戦に終止符を打ちました。

(6) 沖縄特攻機数¹⁾

参考文献1によると、昭和20年3月17日から7月3日までに突入した特攻機種・機数は、次のようになっています。陸軍の97戦や99高練で出撃せざるを得なかつ方でさえ気の毒に思いますが、海軍の練習機『白菊』は爆装なしで229km/hしか出ないのに爆弾を抱えて飛ぶわけですから、さらに気の毒です。陸軍は戦闘機が67%、海軍は攻撃機・爆撃機が56%を占めました。

陸軍:4式重(さくら弾機)3機、4式重4機、97重(義烈空挺隊)7機、99双軽12機、百式司偵7機、2式双襲37機、99襲(軍偵)152機、4式戦119機、3式戦101機、1式戦166機、97戦213機、98直協(99高練)69機、計890機。

海軍:桜花(ロケット弾機)55機、桜花母機(1式陸攻)51機、銀河(陸爆)78機、天山(艦攻)28機、97艦攻74機、彗星(艦爆)112機、99艦爆107機、96艦爆(複葉機)10機、爆装戦闘機(零戦など)316機、水上偵察機(零式など)39機、白菊(練習機)56機、計926機。

3 比島・沖縄特攻の戦果¹⁾

参考文献 1 によると、戦後日本に派遣された米国の戦略爆撃調査団は「この特攻機の攻撃は、ゾッとするように凄く、効果的で、このような戦況下では絶大な実用価値があった。また、強烈な志気高揚の国民宣伝戦によって支持され、煽動されたので、アメリカ軍の機動部隊と攻略兵団の来攻に対し、日本軍が応戦するために使用した事実上唯一の戦法となったのである。そしてこれらのアメリカ軍艦船が、その唯一の攻撃目標となった」と述べています。

下表は参考文献 1 に引用されている『日本海軍航空史』に記載されたものです。

特 攻 奏 効 率¹⁾

作戦区分	特攻実施機数		体当たり機数	至近機数	奏効率 (%)	被害艦船数
比島作戦 硫黄島・丹作戦	海軍	315	111	43	27.1	129
	陸軍	253				
沖縄作戦	海軍	985	133	123	13.4	229
	陸軍	932				
全作戦総合	海軍	1,300	244	166	16.5	358
	陸軍	1,185				

注 1: 特攻実施機数は、海軍は猪口・中島共著「神風特別攻撃隊」により、陸軍は戦史室から得たもの。ただし、未完成で確実性を欠く。

注 2: 体当たり機数は、記録に表されたもののみ。

被害艦船数は、陸軍機によるものか、海軍機によるものかは不明ですので、まとめた数字になっています。米国側は「10 ヶ月の特攻期間における米海軍損傷艦の 48.01%、全戦争期間 44 ヶ月の沈没艦の 21.3%は神風の戦果である」と評価しています¹⁾。

4 わが国の航空工業の歴史(その2)

(1) 航空会社略史⁷⁾⁸⁾¹¹⁾

ア 愛知航空機(株)

愛知航空機(株)の前身愛知時計電機(株)航空機部は、時計生産の傍ら、海軍用の信管、機雷、魚雷発射管などを生産していましたが、大正 9 年から横須賀海軍工廠設計のロ号甲型水上偵察機の製造を開始し、次いで大正 13 年に独ハインケル社のハンザ・ブランデンブルグ単葉水上機を購入し、これを基に水上機の設計を開始しました。独自設計能力も備わり、試作機 He25 型はカタパルト射出に耐え得るもので、これがのちの 2 式水上偵察機となりました。

愛知が生産したのはすべて海軍機で、三菱 13 式艦攻、横廠 14 式水上偵、広廠 15 式飛行艇などを受注生産して会社の基盤を築き、94 式艦爆、96 式水上偵、96 式艦爆、98 式水上偵が制式採用されて、水上機と艦爆の分野で確固たる地位を築きました。昭和 11 年、全金属製単葉艦上爆撃機の競争試作が愛知、中島、三菱に命じられて勝利し、昭和 12 年、99 式艦爆として採用されてからは飛躍的な伸びを示し、零式水上偵、2 式練習用飛行艇、水上偵『瑞雲』、艦攻『流星』、特殊攻撃機『晴嵐』などの傑作機を作りだして黄金期を迎え、昭和 18 年 2 月に愛知航空機(株)になりました。

最後の試作機『電光』が昭和 20 年 6 月に 1 号機、8 月に 2 号機が B-29 の爆撃で破壊され、終戦を迎えました。戦後はまた時計メーカーに戻りました。

イ 石川島航空工業(株)

石川島造船所は早期から航空工業の将来性に着目し、大正 13 年 11 月、石川島飛行機製作所(のちの立川飛行機(株))を創設し、昭和 11 年 4 月、東京市月島の石川島造船所内に発動機工場が創設されました(佃島製作所)。最初はプー・ド・シェール(空の風)型小型飛行機用空冷 25 馬力、次に一般用中級発動機の生産を行いましたが、昭和 13 年 5 月、横浜市磯子区富岡町に工場(横浜製作所)が建設されて海軍の指定工場となり、その後海軍の管理工場となって、1K1A 型発動機 2 台の試作が命じられました。昭和 14 年 10 月、これが石川島造船所航空機部となり、佃島製作所が閉鎖されて、中島飛行機から栄 10 型の生産を受け継ぎ、日立航空機から神風 10 型、天風 10 型などの修理を請け負うことになりました。そして昭和 16 年 8 月、石川島造船所から独立して石川島航空工業(株)となり、富山の中越製布(株)を吸収して出発しました。

二つの型の発動機を自力開発したものの採用されず、もっぱら栄の生産に力を入れて、2,200 台を生産しました。親会社の船舶用蒸気タービン技術を使って、昭和 17 年に千馬力級、昭和 18 年に 2 千馬力級の過給機を開発しましたが、適用発動機に恵まれず終戦を迎えました。昭和 19 年には中越航空社を吸収して、石川島航空工業(株)中越製作所となりました。

ウ 川崎航空機工業(株)

川崎造船所は大正 7 年 7 月、他社に遅れることなく、神戸工場内に自動車科と飛行機科を設立し、航空機の生産準備に着手しました。同年 8 月に仏サルムソン社から、AZ-9 型 230 馬力水冷星型発動機及び 2A-2 型偵(のちの陸軍乙式 1 型偵)の製造権を取得しました。そして、翌大正 8 年 4 月、隣に飛行機製作工場を設立し機体の製作に着手するとともに、大正 9 年秋から発動機試作準備を開始しました。そして大正 10 年秋には、岐阜県各務原に機体組立整備工場と飛行場を建設し体制を確立しました。翌大正 11 年、陸軍から乙式 1 型偵察機 50 機の注文を受けて航空機生産を本格的にスタートし、飛行機科が飛行機部となりました。また、大正 13 年に独から全金属製飛行機の技術を導入してこれの先駆けとなり、発動機についても独から水冷 V 型発動機技術を導入しました。

昭和 2 年 2 月、飛行機部は川崎造船所飛行機工場と改称され、昭和 11 年 6 月に、拡張なった各務原工場に機体工場を移し、神戸工場は発動機専門となりました。そして昭和 12 年 11 月、両工場を中心にして川崎航空機工業(株)が設立され、川崎造船所から独立しました。

これを契機に、陸軍は同社を陸軍専用の製造会社に指定し、名称を各務原工場から岐阜工場に改め、月産 140 機を指示しました。また、昭和 15 年 9 月に発動機専用の明石工場が完成し、月産目標 200 台を目指しました。大東亜戦争開戦後、明石には機体工場と発動機工場がありました。同社が航空機製造を開始してから終戦まで、設計・試作した機種は 30 数種、製造した機数は 11,600 機以上に上りました。

エ 川西航空機(株)

川西清兵衛は中島知久平と大正 7 年 5 月に合資会社日本飛行機製作所を設立しましたが、大正 8 年 11 月に意見が対立して別れ、川西は大正 9 年 2 月、神戸の川西機械製作所の一部門として飛行機部を設置しました。以来、自力開発の川西 1 型から 12 型に及ぶ陸上機・水上機を設計試作し、優秀な技術を認められました。そして昭和 3 年 11 月、独立して川西航空機(株)となり、海軍の指定工場となりました。そして昭和 4 年 7 月、英ショート・ブラザーズ社との技術提携で飛行艇 KF 型の製造に着手し、中型以上の飛行艇製作の基盤を築きました。

傑作機 94 式水上偵、次いで大型の 97 式飛行艇を完成させましたが、後者の性能は米国のシコルスキー及びマーチンの試作機と同等でした。その後は小型機の試作を続けながら、2 式大艇、

『強風』、『紫電』及び『紫電改』という傑作機を生みました。昭和 20 年 7 月、中島に続いて軍需省管轄工場に指定され、**第二軍需工廠**となったところで終戦を迎えました。

オ 九州飛行機㈱

明治以来、福岡市で炭鉱機械類の製造を行ってきた**渡辺鉄工所**が、大正 10 年に海軍指定工場になり、海軍の水雷関係部品を製造していましたが、昭和 5 年に**航空機部**ができ、航空機用車輪部品を製造するようになりました。この年に筑紫郡に飛行機工場を建設してから**海軍 3 式 2 号陸上初等練**の製造が始まり、練習機の試作も手掛けました。

同社は海軍の**92 式艦攻**、**96 式艦戦**、**零式 1 号水上偵**を製造しましたが、昭和 7 年に大刀洗に工場を建設して陸軍の修理を開始し、昭和 12 年にはこれが独立して**㈱大刀洗製作所**となりました。また、昭和 18 年 10 月に兵器部門を独立させて**九州飛行機**となりました。昭和 19 年 5 月には 18 試局地戦闘機『**震電**(しんでん)』(エンテ型機)の試作会社に指定され、昭和 20 年 6 月に 1 号機が完成して、世界の航空史に名を残しました。

カ 昭和飛行機工業㈱

海軍用航空機の製造及び修理を行うため、海軍の肝いりで昭和 12 年、立川に設立されました。翌昭和 13 年に零式輸送機(DC-3)のライセンス生産を開始し、昭和 18 年になって、**99 艦爆**の生産を始めました。戦後、米軍にいち早く接收され、**昭和飛行機**の社名を使用して、戦後初の機体修理工場となりました。

キ 立川飛行機㈱

前述のように**石川島造船所**は、大正 13 年 11 月 1 日、月島に**石川島飛行機製作所**を設立し、**陸軍航空機**を生産しました。昭和 5 年 3 月、陸軍の指導により立川飛行場に隣接する工場を完成させてからは、川崎の**88 式 2 型偵**、**88 式軽爆**、中島の**91 戦**の転移生産を行いました。そして、昭和 6 年、満洲事変勃発とともに拡張を続け、昭和 11 年 7 月に**立川飛行機**となりました。

ク 中島飛行機㈱

若くして海軍機関大尉を退いた**中島知久平**が大正 6 年 12 月 10 日に群馬県尾島町の一民家を借りて**航空機研究所**を設立し、大正 7 年 5 月に川西清兵衛などの資金協力を得て、**日本飛行機製作所合資会社**を設立し、中島式飛行機の試作に着手しましたが、中島は大正 8 年 11 月に経営上の対立から川西と袂を分かち、個人会社の**中島飛行機製作所**となりました。そして、大正 13 年 3 月、東京府荻窪町に東京工場を新設し、航空用発動機的设计生産に着手、昭和 6 年 12 月に**中島飛行機**となって群馬県太田町に本社を設置しました。

昭和 19 年には製作所 12、工場・分工場 56 を数え、従業員数 20 万人、過去最高の 7,940 機/年を生産しました。昭和 20 年 4 月 1 日からは軍需工廠令により**第一軍需工廠**となって、従業員数 25 万人となり、12 の製作所が**製造廠**と呼ばれました。終戦までに、29,925 機を製造しました。

ケ 日本国際航空工業㈱

昭和 12 年、**日本航空工業**が設立され(本社:大阪市、工場:平塚市)、主として陸軍用の機体とプロペラを生産し、昭和 14 年に本社が東京市に移りました。その頃、京都市に**国際工業**が設立され、主として陸軍用の機体と発動機を生産を開始しました。そして、昭和 16 年、この二社が合併し、**日本国際航空工業**となりました。昭和 17 年から**95 練**、**キ-7 輸**などを生産し、特に**キ-86 練**は約千機を生産しました。

コ 日本飛行機㈱

昭和 9 年 10 月、海軍の指導によって、横浜市富岡町に設立されました。昭和 12 年に設備・能力が充実し、海軍航空機機体業者として指定されるとともに、川西の 94 式水上偵の転移生産を開始しました。また、90 式水上初練、93 式水上中練、93 式陸上中練など、生産機数は 2,900 機以上となりました。横須賀の基地に近く、大小の飛行艇や艦載機の修理工場として不動の地位を築き上げました。

サ 日立航空機㈱

大正 9 年に設立された東京瓦斯電気工業㈱大森発動機製作所が母体です。昭和 13 年、大森発動機製作所は陸・海軍の管理工場となり、拡張のために設置された立川発動機製作所が陸軍の専管工場となりました。そして、昭和 14 年に日立航空機㈱として独立しました。昭和 16 年以降の『天風(ハ-11)』『天風改』発動機の生産は 9,800 台に及び、昭和 18 年以降は三菱の『金星』『瑞星』の転移生産を行ったほか、ターボジェット・エンジン『ネ-230』の試作にも協力しました。

シ 満洲飛行機製造㈱

昭和 7 年、満洲国の奉天に日満合弁の満洲航空㈱が設立され、これが、昭和 13 年 7 月に満洲飛行機製造㈱になり、日本陸軍機の修理と他社機のライセンス生産を行いました。昭和 16 年に入ると、陸軍航空技術研究所(国立、立川)内に設計班を常駐させました。軍・民合わせて 5,300 機を生産しました。

ス 三菱重工業㈱

三菱合資会社は、大正 7 年に仏イスパノスイザから 200 馬力及び 300 馬力の水冷 V 型発動機の製造権を取得し、三菱造船㈱神戸造船所で発動機の生産を開始しました。このため、大正 8 年 5 月に航空機部門を独立させて、神戸内燃機製作所として独立させました(大正 10 年 10 月に三菱内燃機製作所と改称)。また、大正 10 年 3 月、名古屋市に大江工場が完成して移転し、機体の生産を開始しました。

大正 11 年仏ニューポール練をライセンス生産で甲式 1 型練、仏アンリオ練を同生産で己式 1 型練として、また、自主設計の軽爆が昭和 2 年、87 式軽爆として陸軍に採用され、技術的基礎を確立しました。そして昭和 3 年には三菱航空機㈱と改称し、名古屋製作所を航空機専門とし、神戸製作所を三菱造船㈱神戸造船所所属としました。その後、昭和 9 年 4 月に三菱造船㈱を三菱重工業㈱とし、6 月に三菱航空機㈱を合併し、巨大会社となりました。

また、昭和 13 年 7 月には、名古屋航空機製作所から発動機部門を分離して、大幸町に名古屋発動機製作所を新設しました。そして、昭和 18 年には、戦局の激化に対応するために、官設民営の工場を水島、熊本に設置し、1 式陸攻、4 式重などの生産を行いました。その後は B-29 の空襲に伴い、工場の分散に努め、終戦時は 6 コ製作所で生産を行っていました。

(2) 川崎防空戦闘隊¹⁰⁾

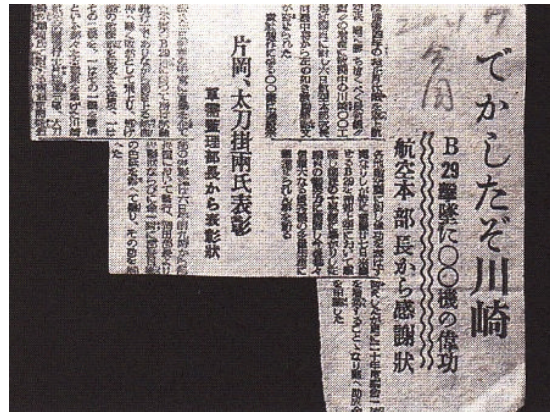
川崎岐阜工場飛行整備課の操縦士たちは、民間人でありながら邀撃戦闘の任務を与えられていました。社内呼称『川崎防空戦闘隊』が編成されたのは昭和 19 年 11 月中旬頃で、マリアナから B-29 偵察機型の F-13 が中京地区に飛来し始めてからでした。川崎の操縦者は航空本部嘱託の身分を与えられていましたが、リーダーが戦闘と偵察の両分科の経験を有する片岡元准尉であったことも関係しているようです。

その頃は、3 式戦『飛燕』II 型の社内飛行試験の最中で、それが機関砲、無線機、酸素ボンベ

などを搭載した『全装備機』であったため、戦闘任務が与えられたのです。しかし、隣の航空廠の軍人操縦者は、敵が来たら逃げるだけでした。修理が終わった飛行機の試験飛行をするのが任務であり、実弾を積んでいなかったからです。

名古屋初空襲の昭和 19 年 12 月 13 日、片岡操縦士は 8 千メートルで超重爆を捉えたが、機関砲が故障しており、別の機体に乗り移って知多半島まで追いかけて、ついに 1 機に黒煙を吐かせました。これが初戦果でした。二度目は昭和 20 年 1 月 3 日で、8 機編隊の 2 番機と 4 番機を片岡操縦士が撃破し、太刀掛操縦士も後続 9 機編隊の 2 番機撃破を報じました。太刀掛操縦士は純粋の民間人でしたが難しい直前からの攻撃を実施しました。また、水口、蓑原両操縦士も民間人ながら戦闘に加わり、講義で受けただけの知識を基に射撃を実施し、離脱しました。

片岡操縦士と太刀掛操縦士は航空本部長から表彰状を授与されました。しかし、片岡操縦士はその後、3 式戦 II 型の試作機で、昭和 20 年 1 月 19 日に事故死しています。1 月 22 日に中部軍管区から東海軍管区が独立したのに伴い川崎戦闘隊には、正式に『東海軍管区司令部特設防空戦闘隊』という呼称が与えられました。



川崎防空戦闘隊の敢闘を讃える 1 月 7 日新聞記事¹⁰⁾

(3) わが国の航空技術力の限界⁸⁾

海軍は、昭和 13 年、中島に対し、四発大型攻撃機『深山(しんざん)』の開発を命じました。しかし、わが国に四発機の製造技術がないため、米国ダグラス社が試作していた民間旅客機 DC-4 の製造図面を購入、その後、鈍重で性能が悪く見放された DC-4 の機体を海軍が買い、中島に提供しました(のちの DC-4 とは全く別もの)。

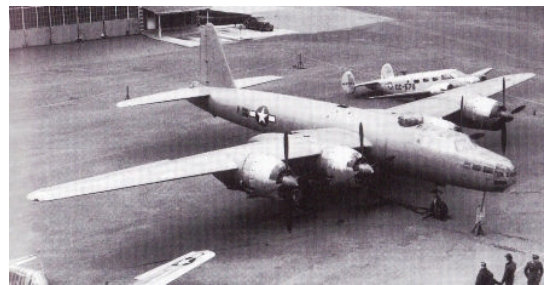
前車輪式の機体は海軍にとって初めてであり、しかも重量面から、ダブル車輪が望ましかったのですが、日本にはその技術がありませんでした。

出来上がった機体も、要求性能には程遠く、故障も多くて、不採用となりました。

しかし、昭和 18 年に入って戦況が激化すると、敵航空基地を叩くという構想から速度 600km/h 以上、爆弾 4 トンを搭載して、11,000km の航続距離を持つ、四発攻撃機『連山(れんざん)』の試作を、海軍は中島に再び命じました。

中島は、松村健一技師を中心に、昭和 19 年 9 月末に 1 号機を完成させました。発動機は、排気タービン過給機付きの中島『誉』24 型ル(2,000HP)でしたが、『誉』発動機・排気タービン過給機ともに不調で、満足な試験飛行ができないまま、4 機を試作した段階で終戦となりました。

以前述べたように、日本の工作機の精度が、職人がヤスリで仕上げたのちで百分の 1 ミリであったのに対し、欧米の工作機は 1 万分の 1 ミリであり、高性能の発動機や過給機が製造できなかったことが、失敗の最大原因であったと思います。



中島 18 試陸上攻撃機『連山』(昭和 19 年)⁸⁾
 全幅:32.54m、全長:22.93m、全高:7.20m、全備重量:
 26,800kg、発動機:中島『誉』24 型ル空冷星型複列 18
 気筒(2,000HP×4)、最大速度:592km/h、航続距離:
 6,482km、武装:13mm 機銃×4、20mm 機銃×6、爆
 弾:4t、乗員:7 名(写真は米国に輸送後のもの)

沖縄特攻による米・英艦船の損害(その1)³⁾

別紙

No.	年	月/日	沈没・損傷艦艇	No.	年	月/日	沈没・損傷艦艇	No.	年	月/日	沈没・損傷艦艇		
1	20	4/6	駆逐艦アッシュ	49	20	12	戦艦アイダホ	97	20	5/3	駆逐艦ラルフ・タルボット		
2			駆逐艦コルフウン	50			戦艦テネシー	98			護衛駆逐艦イングラント(2)		
3			掃海駆逐艦エモンズ	51			駆逐艦スタンリー	99			上陸用高速輸送艦ラスパーン		
4			軽空母サン・ハシント	52			駆逐艦バーディ	100			輸送船カナダ・ビクトリー(艇 or 桜)		
5			駆逐艦モリス	53			駆逐艦ゼンテラス	101			歩兵揚陸艦 580 号		
6			駆逐艦ヘネット	54			駆逐艦キャッシン・ヤング	102			駆逐艦ワッスワース(2)		
7			駆逐艦ハッチングス	55			護衛駆逐艦リトル	103			駆逐艦テラー		
8			駆逐艦ロイウェ	56			護衛駆逐艦ロール	104			駆逐艦トウグス		
9			駆逐艦マラーニー	57			護衛駆逐艦ウォルター・C・ワシ	105			駆逐艦ベニオン		
10			駆逐艦ハリスン	58			護衛駆逐艦ホワイトハースト	106			掃海駆逐艦バトラ		
11			駆逐艦ニューコム	59			敷設駆逐艦リンゼイ	107			傷病者輸送艦コンフォート		
12			駆逐艦ホーワース	60			掃海駆逐艦シェファース	108			病院輸送船ビクニー		
13			駆逐艦ヘインズワース	61			掃海艇グラディエーター	109			駆逐艦ヘルズワット		
14			駆逐艦ハイマン	62			大型上陸支援艇 36 号	110			駆逐艦ハッカー		
15			護衛駆逐艦ウィッター	63			戦艦ニューメキシコ	111			敷設駆逐艦シャノン		
16			護衛駆逐艦フィバーリング	64			中型揚陸艦 189 号	112			敷設駆逐艦ハリ・F・ハウアー		
17			掃海駆逐艦ロッドマン	65			大型上陸支援艇 57 号	113			駆逐艦ベニオン(2)		
18			掃海艇ファンリテイ	66			13 護衛駆逐艦コロー	114			敷設艦テラー		
19			掃海艇ランソム	67			14	戦艦ニューヨーク			115	駆逐艦リュース	
20			掃海艇デフェンス	68				駆逐艦シグズビー			116	駆逐艦モリソン	
21			掃海艇デヴァスターター	69				駆逐艦ダシール			117	駆逐艦リトル	
22			掃海特務艇 YSM-311	70			駆逐艦ハント	118			軽巡バースィンガム		
23			掃海特務艇 YSM-311	71			15	駆逐艦ワイルソン			119	駆逐艦バッチ	
24			戦車揚陸艦 447 号	72				駆逐艦ラッフェイ			120	駆逐艦イングラハム	
25			給油艦ローガン・ビクトリー	73				給油艦タルガ			121	駆逐艦ローリー	
26			給油艦ホプス・ビクトリー	74				掃海特務艇 YMS-331 (艇)			122	掃海駆逐艦マクコム	
27			機雷敷設艦リクルート	75			上陸支援艇 116 号	123			駆逐艦シェー(2)		
28			駆逐艦トウグス	76			上陸支援艇 51 号	124			敷設駆逐艦アロン・ワード		
29			駆逐艦マレイニ	77			駆逐艦ヒリングル	125			貨物運送艦キャリナ		
30			7	空母ハンコック			78	空母イントレピット			126	中型揚陸艦 195 号	
31				戦艦ミラランド			79	戦艦ミズーリ(2)			127	大型上陸支援艇 25 号	
32				駆逐艦ロングショー			80	駆逐艦フライアント			128	護衛空母サンガモン	
33				護衛駆逐艦ウェン			81	護衛駆逐艦ハウアース			129		駆逐艦コウェル
34				掃海特務艇 YMS-81			82	掃海駆逐艦ホブスン			130		敷設駆逐艦グイン
35				駆逐艦ヘネット			83	掃海駆逐艦ハーディング			131		掃海駆逐艦ホギンズ
36				8			駆逐艦チャールズ・J・バッジヤー	84			歩兵揚陸艦 407 号	132	掃海艇ゲーエティ
37			駆逐艦レコリー				85	給油艦タルガ(2)			133	中型揚陸艦 194 号	
38			上陸作戦資材輸送艦スター				86	上陸支援艇 116 号			134	中型揚陸艦 190 号	
39			9	駆逐艦スレット			87	17			駆逐艦ダグラス・H・フォックス	135	駆逐艦イングラム
40				戦車揚陸艦 876 号			88				掃海艇スロー	136	駆逐艦ラウアリ
41				戦車揚陸艦 447 号(2)			89				駆逐艦ハドスン	137	駆逐艦マン
42			10	護衛駆逐艦サミュエル・S・マイルズ			90	22			駆逐艦ワッスワース	138	敷設駆逐艦ヘンリ・A・ワイル (爆装機と桜花による)
43				戦艦ミズーリ			91				駆逐艦インヤワード		
44			空母エンブライス	92			駆逐艦シェー				139	大型上陸支援艇 31 号	
45			駆逐艦ブラッド	93			掃海艇ランソム				140	英空母フォーミダブル	
46			11	駆逐艦キッド			94	掃海艇グラディエーター			141	英空母インドミダブル	
47				護衛駆逐艦サミュエル・S・マイルズ(2)			95	上陸支援艇 15 号			142	掃海特務艇 327 号	
48				駆逐艦マンナート・L・エーブル(桜)			96	25 護衛駆逐艦イングラント			143	掃海特務艇 331 号	

注 1)『第2次大戦米海軍作戦年史』(黒字)、2)『ドキュメント神風』(デニス・ウォナー、ヘギー・ウォナー、妹尾作太郎著)(青字)、3)赤塗り潰しにゴシック太字は沈没、4) (艇)は特攻艦艇によるもの、5) (桜)は桜花によるもの、6)(2)は2回目の攻撃を表す。

沖縄特攻による米・英艦船の損害(その2)³⁾

No.	年	月/日	沈没・損傷艦艇	No.	年	月/日	沈没・損傷艦艇			
144	20	5/5	水上機母艦セント・ジョージ	191	28		駆逐艦シェブリック			
145			測量艦バスマインター	192			商船ジョン・スネイク			
146		8	英空母ビクトリアス	193			商船ブラウン・ビクトリー			
147			英空母フォーミダブル	194			商船メイ・リパモ			
148		9	護衛駆逐艦オウレンダー	195			掃海艇ゲイティ			
149			護衛駆逐艦イングラント(2)	196		輸送駆逐艦タム				
150		10	駆逐艦ブラウン	197		29	輸送駆逐艦タム			
151			敷設駆逐艦ハリ・F・ハウアー	198		6/3	貨物運送艦アレガン			
152		11	空母バンカーヒル(戦場離脱)	199			掃海艇ゲイティ(2)			
153			駆逐艦エヴァンス	200		大型上陸支援艇 119 号				
154			駆逐艦ヒュー・W・ハットリー(桜)	201	5	戦艦ミシシッピー				
155		12	戦艦ニューメキシコ	202		重巡ルイスヴィル				
156		13	空母エンタープライズ(本州沖)	203	6	護衛空母ナマベイ				
157			駆逐艦ハッチ	204		駆逐艦ウィール				
158			護衛駆逐艦プライト	205		敷設駆逐艦ハリ・F・ハウア(2)				
159		17	駆逐艦ダグラス・H・フォックス	206		敷設駆逐艦J・ウィリアム・ディッカー				
160		18	輸送駆逐艦シムス	207	7	駆逐艦アンソニー(2)				
161		20	駆逐艦サッチャー	208	10	駆逐艦ウィリアム・D・ボーター				
162			護衛駆逐艦ジョン・C・バトラー	209	11	大型上陸支援艇 122 号				
163			輸送駆逐艦チェース	210	16	駆逐艦トウイス(爆発か桜花)				
164			輸送駆逐艦レジスター	211	21	護衛駆逐艦ヘロラン				
165			戦車揚陸船 LST-808	212		水上機母艦カーティス				
166		24	駆逐艦ゲスト	213		水上機母艦ケネス・ホワイトイング				
167			護衛駆逐艦オーネイル	214		中型揚陸艦 59 号				
168			護衛駆逐艦ウィリアム・C・コール	215	駆逐艦ハリ					
169		24	掃海駆逐艦ハトラー(2)	216	22	掃海駆逐艦エリス				
170			掃海艇ベクタクル	217		戦車揚陸船 LST-534				
171			輸送駆逐艦ハリ	218		中型揚陸艦 213 号				
172			輸送駆逐艦シムス(2)	219	7/19	駆逐艦サッチャー(2)				
173			中型揚陸艦 135 号	220	21	上陸作戦用輸送船マラソン(艇)				
174	25	輸送駆逐艦ヘイツ	221	24	護衛駆逐艦アンターヘル(艇、ルソン沖)					
175		駆逐艦ストームス	222	28	駆逐艦キャラガン					
176		輸送駆逐艦ロウパー	222		駆逐艦ブリチェット					
177	26	駆逐艦アンソニー	223	29	駆逐艦キャッソン・ヤング					
178		駆逐艦ブレイン	224		輸送駆逐艦ホレス・A・ハス					
179		掃海駆逐艦フォートレス	225	8/9	駆逐艦ホリー(本州沖)					
180		駆潜艇 PC-1603	226	8/13	上陸作戦用輸送船ラグランジ					
181		測量艦タットン	227							
182	27	駆逐艦ドレグスター								
183		掃海駆逐艦サウサード								
184		輸送駆逐艦ロイ								
185		輸送駆逐艦レッドノア								
186		上陸作戦用輸送艦サントーヴァル								
187		消磁船 YDG-10								
188		駆逐艦アンソニー(?)								
189		駆逐艦ブレイン(?)								
190		護衛駆逐艦キリガン								
				青字ブレインとアンソニーは 26 日の誤り?						

注 1)『第2次大戦米海軍作戦年史』(黒字)、2)『ドキュメント神風』(デニス・ウォナー、ヘギー・ウォナー、妹尾作太郎著)(青字)、3)赤塗り潰しにゴシック太字は沈没、4)艇は特攻艦艇によるもの、5)桜は桜花によるもの、6)(2)は2回目の攻撃を表す。

おわり

次回は最終号「帝國陸軍航空の終焉」

< 参 考 文 献 >

- 1) 「陸軍航空特別攻撃隊史」(昭和 52 年 12 月 生田 惇著 (株)ビジネス社)
- 2) 「特攻の町知覧 最前線基地を彩った日本人の生と死」(平成 19 年 5 月 佐藤早苗著 (株)光人社)
- 3) 「特攻」(平成 19 年 5 月 森山 康平著 (株)河出書房新社)
- 4) 「特攻 外道の統率と人間の条件」(平成 17 年 7 月 森本忠夫著 (株)光人社)
- 5) 「陸軍特攻 振武寮」(平成 21 年 12 月 林えいだい著 (株)光人社)
- 6) 「特攻隊員たちへの鎮魂歌」(平成 19 年 5 月 神坂次郎著 PHP 研究所)
- 7) 「日本軍用機事典 陸軍篇」(平成 17 年 9 月 野原 茂著 イカロス出版(株))
- 8) 「日本軍用機事典 海軍篇」(平成 17 年 3 月 野原 茂著 イカロス出版(株))
- 9) 「群青 知覧特攻基地より」(平成 9 年 1 月 改訂 2 刷 知覧高女なでしこ会編 高城書房出版)
- 10) 「空の技術」(平成 22 年 3 月 渡辺洋二著 (株)光人社)
- 11) 「日本航空史 昭和前期編」(昭和 50 年 9 月 (財)日本航空協会)
- 12) 「特攻 空母バンカーヒルと二人のカミカゼ 米軍兵士が見た沖縄特攻戦の真実」(平成 22 年 7 月
Maxwell Taylor Kennedy 著 中村有以訳 (株)ハート出版)
- 13) 「神宮皇學館大学戦歿学徒慰霊祭記念講演 戦歿学徒の心」(平成 7 年 12 月 講演者:岡村清三
皇學館大学出版部)
- 14) 「帝國陸軍の最後」(昭和 44 年 5 月 7 刷 伊藤正徳著 (株)文藝春秋)
- 15) 「ほんとに 彼らが日本を滅ぼす」(平成 23 年 7 月 佐々淳行著 (株)幻冬舎)